基肄城築造1350年

基肄城を知る⑲

―基肄城と烽火―

「烽火」と書いて何と読むかご存知でしょうか。正解は「のろし」と読みます。

烽火とは、煙や火を使って、遠くにいち早く情報や合図を伝える方法のことです（図1）。「のろし」の漢字には、「烽火」、「烽煙」、「烽燧」などの字が使われますが、後に「狼煙」とも表現されるようになります。これは、狼の糞を混ぜて焼くと煙が直上することから、「狼煙」という漢字があてられていたようです。犬よりも狼の方が肉食であるため、その糞には動物性タンパク質の残滓がより多く含まれており、よく煙が上がったのではないかといわれています。

図1　烽火のイメージ図

基肄城が造られた頃から、日本では本格的に烽火が使われ始めたようです。基肄城築造のことも記されている『日本書紀』には、「対馬、壱岐、筑紫国等に防と烽とを置く。」という文があります。「烽」とは、烽火のことを指しており、国家をあげて、烽火を使った通信制度を確立させようとしていたことが分かります。その後、8世紀には、対馬から近畿地方にある藤原京・平城京までの通信手段として烽火が採用されますが、10世紀以降になると衰退していったようです。

では、基肄城では、どこで烽火を上げたのでしょうか。現段階では、その場所を正確に特定することができていません。しかし、城内において烽火を上げたのではないかと推定される場所が数か所あります。それは、東峰の頂上付近にある「つつみ跡」や、その少し下方にある「鐘撞跡」などです。これらの地点は、周辺の地形に比べ高台状になっており、現在は木でよく見えませんが、木が無ければ、広く見晴らしがきく所に位置しています。しかし、推定の根拠は高台で見晴らしがきくという点などで、これまでに烽火に関係するような遺物や遺構などは確認されていません。

さて、烽火の伝達はどのくらいの速さなのでしょうか。平成23年に開催された、第2回古代山城サミット山鹿・菊池大会で烽火リレーが行われました。その結果から、ある程度の速度を推し量ることができます。このときに行われた烽火リレーは、大宰府政庁跡から鞠智城跡までの14か所をリレー方式で、烽火を上げてつないでいくものでした。前の地点で烽火が上がったことを確認した上で烽火を上げ、次の地点に伝えていきます。1番目が大宰府政庁跡、2番目が大野城跡、そして3番目の地点として基肄城跡から烽火を上げました。基肄城の場合、現在、城内は木で覆われているため、太宰府・大野城方面を見ることができません。そのため、城外にはなりますが、現在草スキー場として使用されている小高い丘から、大宰府政庁跡や大野城跡で上げられた烽火を確認しました（写真1）。確認後、基山公園の駐車場から烽火を上げ、次の地点である宝満川堤防につなぎました（写真2）。このように、大宰府政庁跡から鞠智城跡までの約100kmを烽火でつないだ結果、約1時間かかりました。その速さは、時速100kmほどにもなります。

現在では、携帯電話やインターネットなどの通信制度が整えられ、遠くの海外にいる人にも、情報を簡単に伝えることができます。しかし、そのようなものが無い時代には、烽火を駆使して、少しでも早く情報を伝えようとしていました。当時の人々の苦労と知恵の数々を「烽火」からもうかがい知ることができます。

写真1　草スキー場の丘から見える烽火（中央よりやや左側が大宰府政庁跡、右上が大野城跡）

写真2　基山公園駐車場での烽火

※問合せ先
教育学習課　ふるさと歴史係
電話92―2200